

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(三):『幻中草抄』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2008
Jtitle	三田國文 No.47 (2008. 6) ,p.67- 77
JaLC DOI	10.14991/002.20080600-0067
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20080600-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陽明文庫蔵「道書類」の紹介(三) 『幻中草抄』翻刻・略解題

恋田 知子

前号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『幻中草抄』を紹介する。これまでも述べてきたように、陽明文庫蔵「道書類」は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間(一五九六—一六二四)の奥書を有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、おそらく同じ時期に書写されたものと推察される写本群である。本書は内題に記されるとおり、お伽草子『幻中草打画』の抄出本であり、その奥書によれば、慶長十一年に他本より転写されたものである。その書誌は、以下のとおりである。

- ・ 函架番号 近ト一七二一ヌ
- ・ 形態 写本。一冊。
- ・ 寸法 縦二三・七糎。横一九・五糎。
- ・ 表紙 本文共紙。楮紙。仮綴。
- ・ 丁数 墨付十四丁。
- ・ 本文 半葉十一〜二十二行。漢字平仮名交じり。
- ・ 内題 「幻中草抄」

・ 奥書 「慶長十一年他本取帰ヲ暫留此昏折節閉テ在之ノ故
写之者也但分不見一笑々」

・ 印記 一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。

『幻中草打画』については、従来岡見正雄氏の翻刻紹介²⁾によって紹介された本が唯一であったにもかかわらず、その所在が明示されなかったことや他伝本も未発見であったことからか、お伽草子研究においては、あまり顧みられることがなかった。しかしながら近年、『田中穰氏旧蔵典籍古文書目録』によって、国立歴史民俗博物館に所蔵される『骸骨』なる写本が『幻中草打画』であると報告された³⁾。加えて、稿者による調査の結果、岡見氏紹介本の所在と陽明文庫本の存在が明らかとなり、仮名草子『一休骸骨』の先蹤作としての本作品の意義がより明確なものとなった。

本書には、岡見氏紹介本や歴博本に見えるような骸骨の挿絵はいっさい付されていないものの、「此を御らんすへし」(三丁表八行目)などとする挿絵についての本文は存在し、画中詞や挿絵に付された道歌が省略されていることなどから、原本に

は挿絵があつたものと推察される。おそらく、絵巻ないし絵本の『幻中草打画』から法語部分のみを抄出し、「幻中草抄」と題したものと判断される。先にふれた現存伝本それぞれとの間に若干の異同が認められる上、画中詞および道歌の大半が省略されてしまっていることから、どちらの系統の本文によつたかは見極めがたい。本書の最大の特徴としては、省略された道歌を補うかのように、巻末に新たに計二十七首の道歌を付す点があるが、それらはいずれも他伝本には見られないものであるが、物語草子や談義・唱導の場で用いられた道歌と共通するものも少なくなく、物語内容から連想されるような道歌が付されている点でも非常に興味深く、貴重な伝本として位置づけられよう。

なお、翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、紙面の都合上、一行に収まらず、改行を余儀なくされた箇所（九丁裏以降）がある。また、私に句読点を打ち、読解の便宜をはかった。

注

- (1) 陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐる―」（『唱導文学研究』第六集 三弥井書店 二〇〇八年）、拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子―『恋塚物語』をめぐる―」（徳田和夫氏編『お伽草子百花繚乱』笠間書院 二〇〇八年刊行予定）などで論じた。
- (2) 『幻中草打画』翻刻（『近世文学 作家と作品』中央公論社 一九七三）。
- (3) 『田中穰氏旧蔵典籍古文書目録』国文学資料・聖教類篇』（国立

歴史民俗博物館 二〇〇五年）。

- (4) 本書を含めた「幻中草打画」をめぐる諸問題については、拙稿「説法・法談のヲコ絵―『幻中草打画』の諸本―」（『仏と女の室町物語草子論』笠間書院 二〇〇八年）を参照されたい。

【附記】

本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜りました、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げます。また、本書の翻刻・考察に際しまして御教示賜りました、陽明文庫文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げます。

【翻刻】

幻中草抄

来りてしはらくもと、まらさるは、うみてんへんのさと、しやうめつを此所にさためかたし。さりて二たひ帰らさるはめいとときやくしやうのわかれこうくわいを誰かひるにとはん。みるもきくもみなあた也。しきりに涙をほくはうの露にそう。したしきもうときもちとまもおほくかくれぬ。

むなしく恨をとうたいの煙にむすふなど、されはおしむにかひなき露の身なれば、すて、しゆしてらく

あるほともなき世なり。我も人もつらく、うき世をくわんしつゝ、三かいのうちのすみかはいよ、物うくて、きおんにうむあいの心さしはふかくして、古郷をあしにまか

せてうかれ出て、いつくをさすともなく行ほとに、しらぬ
「（一オ）」

野原に入かり、袖もしほるゝ藤衣、日もゆふ暮になりぬれば、しはしかりねの草枕、むすふたよりもなきまゝに、あなたこなたを見わたせば、はるかに道よりひきいりて、山もとちかくさんまいはらとおほしくて、ほかともほかともその数あるかなきかに、ことの外あれたるふるきたう一見ゆ。うれしくおほえて、たうをさして分行は、風にみたるゝ花すゝきまねくけしきもあはれに、

世の中に秋風たちぬ花すゝきまねかはゆかん野へも山へも。やかて、此たうにたちよりて一夜ををくる。つね

「(1ウ)

より心ほそくして打ぬることもなかりけり。あかつきになりて、ましろみし夢にたうのうしろへ立出ければ、こゝかしこにふるきかいこつおほくむれいて、其ふるまいおなしからず。世にありたる人のことし。あなふしきの事やと思ひて見る程に、あるかいこつちかくあゆみよりていはく、

さてもさはその身のはてのいかならんよそかましの人のけしきや。けにこはりとおほえて、

しはしけにいきの一すちかよふほと野へのかはねもよそに見えけり。さても、したしみよりて馴そふ程に、日ころわれ人をへたてける心もうせはてゝ、しかも常「(2オ)にあひともなひけるかいこつ、世をすて法をもとむる心ありて、あまたのちしきに尋あひ、あさきよりふかきに入て、我か心のみなもとをあきらめ、古郷にかへりて

せつほうけうけをせしを、はしめよりおほりにいたるまてつきそひて見聞しに、外より人のよふ心ちして、俄におとろきぬ。ひとつの夢既にむなし。みゝにみてる

物は、松風の梢をはらふ聲に、山更にあげなんとす。まな

こにさへきる物は、桂の月の枕に残るかけ、わつかにへんしの間におきて、あまねくたねんの事をみる。抑いつれの

時か夢のうちにあらさる。いつれの人かかいこつにあらさる。

しはし十方の衆生も、まうさうの夢のうちのかいこつ「(2ウ)

にむすふ。あにたゝ此一巻の糸にかくところの。身かいたのにあらむや。しるへし、生と死とひとつにして夢と覺ると同じ

事なり。それかいこつと申はとて、此身の外にかやうの

物のあるにもあらず。人ことにしはらく此かいこつの男女の色をあらはして、いきたえ身の皮やふれは其色なし。

上下のすかたも見えわかす。たゝいまかしつきもてあそふ、

皮のしたに、此かいこつをつゝみてもてありきけるとおもひて、此糸を御らんすへし。世の中のさためなくしてをくれ

さきたつ事、いまにはしめたる事ならねとも、けふ此

比、かやうなるあへなき事のあるへしとは、かねてもしらぬことなれば、俄にあらぬことのあるやうに、おとろく事の

「(3オ)

はかなさよと思ひとりて、さまをもかへんと思ひとりてたつとき僧をしやうしてかみをそり、かいをたもち

てのち、わか身のあるへきやうをとい申ければ、此そう

申されけるは、此所も昔にかはりたり。いにしへ道心をおこすとて、寺を出るをいかなるゆへやらんと見れば、

はうすにちしきもなく、あつまる僧も心さしのなきゆへ也。めんくのやうなる世をすてたる人も、善徳は物うく思ひ、くふうをはなさずして、道具をたしなみ、座敷をかさり、かまへたかくして、みやうしをのそむ。かやうのふるまいを見る時は、心さしのある人のまじるへきやうもなければ、出るもけには道理也。かやうの事を聞

—(3ウ)

たりとも、さらは道心をおこし、くふうをなし給はずして、た衣をきるはかりにて、きやうもんうせず。世間にいろいろ、なをもとめ、とくの有ことをもとめ給は、たとりかへたるさいけなるへし。衣けさはよくもきたれば、よくもあしくも、なか／＼きぬにはおとり候。かいをやふりて衣をきれば、衣はなわとなりて身をしはり、けさはくろかねのしもつと成て、身をさいなむとしやうけうにはみえたり。よく／＼心へへし。はかいなるそうひくにのありくあし跡をは、五千のおにぬす人のふみたる跡なりとて、はうきをもつて是をはくとこそうけ給候へ。か様に申とて、百千万のひとつなり。かいをも

—(4オ)

心さしあらん人にとひ給ふへし。ゆめ／＼おこたる事あるへからず。かやうにしめし給ふを聞て、仏のをしへのまゝに身を持って、あまたのちしきにあひ奉りて、一大事のゐんえんをとい、又心さしある人の所へは、道のとをきをかへりみず、尋ありきて山にもこもりて、きゝをきし所をもしつかにかへしみると思ひて、ある

山里に分入けるに、此里人とおほしくして、年のよりたる女一人、行あひける。うれしく思ひて、此へんあきたる庵や候と尋しかは、此女申けるは、あれに見え候松のもとにこそ心さしの御わたり候ひくに申て、人の常にまいり候へはをしへ奉らんとて、ふみまよふへき道ををしへて帰り—(4ウ)けり。此をしへのまゝにゆきてみれば、柴の庵りのあれたる一つあり。立よりて、物申さんといひければ、年七十斗なるひくにのまゆには霜をたれ、こしは二重になり、かすみそめの衣にくり色のけさをかけて、何事そと

てあゆみ出たり。是はあんきやのひくにて候。うけ給およひ候。是まで参りて候と申ければ、是へ御入候へとしやうし給ひければ入て見るに、一けんまなかにとこをはりて、えんさひとつをきたり。前には石かなわに、ほうろく一つより外は見えたる物もなし。しはしはたかひに物をもいはす。やゝありて、きやくひくにに申けるは、

行すゑも帰らんかたもおもほえずいつくもつゐの—(5オ)

すみかならねは。といはいはく、かみをそり、衣をそめて、かやうには成て候へ共、更に一大事のいはれをしらす候。若かやうになりて候とも、此いはれをしらすは、ひくに成て候かひあるましく候としへ候程に、是まてはる／＼と尋まいりて候御しひをもつて心へやすく候やうに御しめし候へ。こたへていはく、身つからもか様に成て候へ共、またさうおうのふつも候はねとも、さりながら聞をきし事をあら／＼語りてきかせ候はん。つらくしやうしりんゑのいはれをたつね候へは、うさうしうちやくのまうねんよりおこり、わつかに世間に

ちやくする思ひをひるかへせは又仏にちやくする思ひをとかを
なす。是ひとへに一しんのため也。いはれをしらざるゆへに

「(5ウ)

みえたりにくしあしの心にしたかふ。しかるに此心はひとり一
さいのさうをはなれば、まむほうの心のみなもとを
しる。此心をたねとして一さいの念は起る也。諸の命をころし
ては地こくにをち、物をおしみてはかき道也。物をしらすし
てはちくしやうとなり、はらをたて、はしゆらとなる。五かい
をたもちては人となり、十せんかいをしゆしてはてんしやうに
生る。是を六道といふ。此上に四しやうあり。是をくわへ
て十かいといふ。皆是一念のなすところ也。今一念かへし見る
に、とるへきかたちもなく見るへき色もなし。おこりて来
れるはしめもなく、さりてとまるおほりもなし。ちう
けんも又ちうしよもなし。されは、念よりおこる所の十かい

「(6オ)

も、又かくのごとし。仏もまことになければ、ねかひもとむへ
き所もなく、しゆしやうもなければ、きらいすつへき所も
なし。大そらの雲のごとし。水の上の淡にたり。た
おこる所の一念もむなしきかゆへに、なす所のまんほう
もまことにあらず。則一念の外にまんほうなく、まんほう
の外に一念なし。念と法とひとつにして、ことごとく此心
むなしき也。此時、一さいの物を見るときみなくむなしと
思ふ念のおこるをも、くうとも思ふへからず。むなしとおも
はざるところをもよしと思ふへからず。さては、一さいをよ
しとおもはざりける物をも、又おもはずして、といひは

く、さていかなるいはれにてか、道心をはおこさせ給ひける

「(6ウ)

そや。こたへていはく、我もおさなかりし時、父母のはから
ひによりて、かみはさみて、寺にをきたりしかとも、
かやうの一大事をもしらす、経をよみ、仏をおかむ斗
を、ひくにのわさなりと思ひて、是をたしなみ、又色よき
衣けきを見ては、うら山しく思ひて、ひんなるおやをわ
つらはせて、たうくをたしなみ、みやうしをのそみて、
すてにさうすまで成たりし時、おなし所の人の
子を、かつしきになしておきたりしが、俄にしたりし
とき、人間のさためなき事を思ひとりて、たんめん
衣のまゝにて、はちけさはかりを袂に入れて、寺を
出て、あまたの知識をたつねありきて、いまはふしん」(7オ)
なしと思ひて、此山に入て候しか、猶もよくく
さうほうするほど、ちしきのしたにいるへく候ける。物
をと、いまはそれのみくやしくとそかたられける。
これを聞て、誠にたつとくおもひて、朝夕水をくみ、
たきを捨ててをいとなみ、夜るは座をならへてお
こなひけるか、ある時とふ、人のはしめはいかなる物にて候
けるそや。是を聞て、我も此不審をおこして候し也。
たとへは人の父母は火うちのごとし。かねは父、石は母、火は
子也。是をほくそにたて、薪油につくるかことし。
父母のあひあふ時、火うちのかとに打あはする時、火の出る
かことし。人の子はいてくる也。されは、ひははしめなき

「(7ウ)

物なれば、つゐにはたき、油のえんつくくる時は、火もやかて

きゆる。人もちゝにもはゝにもはしめなかりしゆへに、

つゐにはうする事也。といていはく、かやうになにもものかちこくにおち候そや。こたへていはく、人の心はえんに

よりていてくる物を、まことありと思ひて、是にてよし

あしを分、我心によき事をはよろこひ、又あはぬ時は

はらをたつ。此二つの心を種として、心にかなふ事

をたねとしてはりんえし、又あはぬ心をたねと

しては腹を立、又へつらいては地こくかきのくをうくる

なり。されは、心にかなふをもよろこふへからず。たゝし

此一大事をあきらめすは、一さいの罪をつくし、ほん〔(8才)

ふんにかなひ候へし。といていはく、いかなるを道心と

申そや。こたへていはく、まことの道心とは仏に有ても

まさらず、人にありてもおとらず、生れてもきたらず、

しゝてもさらす。いかなるゆへ、かやうなるそといへは、めに

見ゆる物、耳に聞、又心に思ふ事、そふして一さいの物

は、かりにむなしく成て、ひとつもとゝまる事なく

してさりけるそと見るを、道心とは申也。よのつね

の人のさためなきうき世なりとて、世を捨るはしはらく

の事也。又一さいのむなしとも思ひはつましき事也。

むなしきこようより、一さいの物をはくゝみて、一さいの色

を出す。こうなれば、ほんふんのでんちといふ。いかなる

〔(8ウ)

ゆへに、ほんふんといふといへは一さいの草木は皆地より出

一さいの色はこくより出るか故、なにかりのたとへをもち

て、ほんふんのでんちといふなり。

さくら木をくたきて見ればたねもなし花をは春

の空そもちける。此哥の心をもちてしるへし。むなし

き空より一さいの色のいつる事をたゝ春の花のみ

にあらず。夏秋冬の草木の色のうつりかはるをも

心へへし。といていはく、國にてはろさいをするかほんいにて

候やらん又かいたうをよういしていつへ候しか。こたへていは

く、是程のことは人にとふまでもなき事也。髪をそり、

衣をきる程にては、はちより外は我物とて、かみの一状

〔(9才)

をも持へからず。朝には百門に立て乞食すへし。努々ほ

いたうを持へからず。又たんなの僧を供養するを見

れば、ときをたにもくやうすれば、是より外の事

なしと思ふ。又ひくにの方より、経をよみて、まうしやを

たすけ、しむせをつくのはんとす。此分にては僧もたんなもち

こくに落る事うたかひあるへからず。問云、さていかやうにた

んなをはお

しへ候へきそや。答云、さきに申候つるやうに、本分のくふう

をなさせて、是

も此くふうをなす事は我身のため也。又まうしやのためには経

たらにをみつ

へし。かやうにいふ人のくふうときやうといふも、すへてたゝ

我心のみなもと

をさとぬれば、一切衆生をたすくへし。此内に我こゝろさす

まうしやも

のかるへからず。いかなる故そと云に一切の仏と衆生と替る所なき故也。仏と衆

「(9ウ)

生とは皆まほろし成故に、又いはく、ろさいの殊にすぐれたる事は、むえんの

者、僧にも近付えざる者のもとに行て、齋の次に一大事のいはれをいひてき

かする故に、ろさいの時も家をえらはす。したひにすへし。しやうほんの僧

は家三つ、中は五、下は七つ也。是も家をもらさす。結縁するためにろさいを

第一の行とす。といていはく、人のしゝたる時いかやうになり候そや。こたへていはく、四た

いを分てかへし候也。四たいとは風火水土の事にて候。人ことに是をはなれたるもの

候はす。されはいきは風あたゝかなるは火うるおい有は水のとく也。是をやき若

うつみもすれば土と成候。此時主とてとゝまる一も候はす。四たいを分返す

を見る時はしぬるとはかりにつけたる也。又迷ひの眼より見る也と、さる人はし

やうちうなりと見るゆへに、何事も皆偽の世成けり死るといふもまこと

ならねは。是を不老ふしの薬とも云。といひていはく、身はしね共魂はしなすして

「(10オ)

残り留ると云人も在。又身も魂もおなしくしぬると云も在。何

を真と申へき

そや。こたへていはく、身はしぬとも魂はしなすと申はけたうとてあしき者

の言葉也。身のしねはたましゐもしぬるといふは仏の御ことは也。

是によりて心得へきやう在。身もたましゐも一とにしぬるといふも、たとへは人のめの男にしたかひて外へ行^xの内の

の者の主にしたかうにはあらず。たとへは合たる焼物のことし。焼

物は人の身のことし。匂ひは心也。人の身と申は四たいのよりあふ時、

たき物を合すれば匂ひの出くるかことし。人の心は在物をしらすし

て出さるとみるは、おうきなるあやまり也。身とたましゐと二つありと見るもの。まよはずといふ事あるへからず、よく

く心得へき事也。といていはく、いかなるをまことのふつほうを

「(10ウ)

修行すると申そや。答云、真の仏法を修行すると申は仏法をならふにはあらず、我ひか事をやふる也。ひか事と云はめいこ

ほん

しやうの四そうを云なる。めいと云は迷ひ、こと云はさとり、ほん^と云

は人、しやうと云也。此思を破れはをのつからほんふんちかつくを、今人

の思ふ事は、皆我はほう成と思ふ時は仏をうらやみ、迷ひそと思ふ時は

さとりたき思あり。此迷ひ禅ほんふんの仏の四門を以て本分ノ仏ヲ

くらまず也。本分の仏ト云ハ虚空ノ事也。此こくうをはたいくわうみ

やうさう三まい共云、又はこんかうの正躰共云。あるひはしんけんとも

云。本来のめんもなくと申も、皆是本分の天地也。一切の色形在物は皆本分に帰るへし。一切の色在もの、一つとしてむなしからず

と云事有へからず。むなしく成を本分にかへると云也。今トキノ人は

「(11オ)

此りをしらすとてかへに向て禪さずらときによりておこる念は皆真あらざる事ヲしらすして一切の事をおもはぬを、させんとすると思ふ、さうねんをおこさしと打拂ひて、何事も思はぬ物にならむと

てすこししつかなれば、まうくとして眠る。又ひころあてかひはか

らざる事の出来たるは、さちうニいてきたる物なれば是も能事やとうたかひ、又念の起る時はしんの言葉をこうあんとして是にてさう

念をさまざまとする人も在。こしんのこうあんを人にあたうる

ことはかやうのようしにあらず。たゝ本分をしらざる人に、是

をしらせんか

ために、こしんのほんふんのかなひし時の詞を、いかなる故にこしんはか様に

いひけるやらんとうたかはせんために、是をかやうにこうあんとしてうたかは

せて不審をとほせて、本分かなはせんため也。若此所を聞いてめいこ

「(11ウ)

むほんしやうの思ひをやめは、をのつから本分に近付へシ。但男はおとこの俣、

女は女ノ俣ニテ此身をも心をも真なき事を知テのそむ所なきをせんなんしせん女人とて仏はヲほめ給ふ。在家の五よくの中ニモ

修行スルヲハくわちうの蓮花とて仏毎に是をほめ給ふ也。此五よくも縁ニよりて出くるゆへにまことなし。まほろしなればとてもいとふ

へき誠の身心もなき故也。是程のまほろしの身を祈るとて、もてあつかふ事をいましめてまろくのきやうをとき給ふ。

此教

のことくにはなくして、あまつさへ此きやうをほめて身を祈るもの、

いかてか仏の御心になはんや。たとへは人の大事を文に書て下人

の方へつかはしたらん時、若此下人といふ人にして文様子をはしらす

して是を日毎に取出して巻返し、文字をかすへて日を送り候共

〔(12オ)〕

いかてか其主の心になはんや。結句其文ヲ主ノ前ニ持来テ其文字をか

そふとも叶事あるへからず。仏法も又かくのごとし。今時経ヲよむ人ヲ見れば、

其経のをしへのことくにはふるまい候はずして、仏のいましめ給ふみやうりをいのらなため

に此経をよみて神仏をすかし奉りて物をこい奉る。いかて仏神の御心になはんや。

かやうの人の心にとうしんしてさらはなんちか申事かなえんとて、仏法に

そむくことをし申事あらむや。神三ねつのくるしみあると申もしゆしやうに

とんしんちとて三つのとかあり。是によりてしゆしやうの地こくへおつることを

なげき給ふを三ねつのくるしみとは云也。とんと云はむさふるしんといふはいかり

ちといふはくちなる事也。仏法をしらすして此三つの心をおこすをいましめ給ふ。

今人のいのりと申事は皆神の心こそむく事也。されは外に人の申事の思ふやうに

かなはぬ事は仏神の御心にそむく故也。此人の仏神をしんするはふつしんのような

しにあらす。たゝ身のため也。仏神をしんすると申は仏神のここによりて我等此仏

法を聞、是によりて生死をはなれんする事はひとへに仏の御お

んにあらずやとて此ほうおんのためまいりて候と礼拝するをまこと仏神をしんする人とは申へけれ。

かやうのりをはしらすして我しらぬ心をほんとして心のまゝにふるまいたまふは人けんらうせう不定なり。いつる息入息をまたす。こつめつにせめのかれかたし。ち

こくにおち給ふへし。かきちくしやうしゆらにんてんの六道のたねは皆我心を

まことにありと思ひてなすうけたる也。たゝし此身をも心をもまほろし

のやうなれば、すへてまことなしとおもいて一さいのことをさるとも皆

是まほろしなるへし。若此身をも心ヲモまことにありとおもはゝ、一さい

せんこんも是りんえしやうしのこうなるへし。といていはく、爰に

人のふしんあり。仏五十よ年の説法ヲ聞てをしへのまゝに修行せん

すれば、さいこにの給ふやうを聞は、はしめよりおほりにいたるまで一字を

もとかすといひて、仏てつから花をさしあけさせ給ふを、かせうかすか

に咲し時、仏のたまはく、我にまさしきのり。たへなる心あり。けふより

〔(12ウ)〕

なんちにふそくす。末世の衆生にほとこすへしとのたまへり。
仏の御

詞なくしてはなをあげ給ひしを、かせういかなるいはれともと
い給はてわらひ

給ひし時、是をゆるしたまふ事はいかなるいはれそや。こたへ
ていはく、仏五

十余年の説法はたとへはおさあひ者をいたかんとする時は手の
内に物有

ことをいひてちかつきいたくかことし。五十余年の説法は手を
にきりておさ

あひ物をまねくかことし。此故に方便と云。今仏かせうにつた
へ給ひ候し處の

法は此おさあひものをいたきとりたるところ也。此花は身をも
てなしてもし

はきにもあらず、心にはからいてもしるへきにもあらず、口に
いひてもしるへから

す。此しんくを成して修行すると云事をしりて身をかりてはさ
して見、心を

かりてはなして見、口をかりては人にとふへし。此心をしらん
とおもは、一さいの所

にて、さても仏のあげ給ひしところの花をかせうのわらひ給ひ
し事はいか

なるところそと見るへし。此いはれをしらすは、一さいのほう
もんをしるなり

とも世の中物しりなる人とはいはるゝ事あるまし。仏法しやと

はいふへからす。

此花は三世の諸佛の世に出て一せうの仏との給ひ候此花の心
也。てんちくの

廿八そたうとの六そより此かた一大事と云は此事也。一大事と
いへはとてせけんのに

くることを大事といふやうは心へへからす。一大事と云は本分
の天地の名也。ほんふん

の天地とは心のみなどのな也。心のみなとゝいふはこくうの事
也。こくうは一さいの

物のはしめなるかゆへに一といふならひなきかゆへに一大事と
云。是によりてこ

くうを一大事と云。たゝ此一大事をしらすはいたつらことをや
めて是を尋へし。

此花のいはれをしるならば、一さいのもの仏法なるかゆへにい
たつらなるものなし。

是をしらざる時は仏法とおもふもいたつらなるへし。

古人云、通玄峯頂不異、人間外無法滿目

夢の世にまほろしの身の生れきて露に宿かるよひのいなつま
出るとも入とも月をおもはねは心にかゝる山のはもなし

世の中はおもきたきゝの山かへりすてあかる人はくるしみもなし
世をすつる人はまことにすつるはすてぬ人こそすつるなりけれ

いくたひかおもひさためかはるらむたのむましきは心なりけり
かそふれは我身につもる年月ををくりむかふとなにいそくらん
秋も秋なかはもなかは月も月所もところ見る君もきみ
まつしまやをしまいかにととふ人にそのまゝ語る哥の葉もかな

「(13ウ)

よるの雨の心のそこにとをるかなふりにし人や袖ぬらすらん
けふりたつ庵りのうちに人もなしされ共よ所にたそとこたふる
南無といへはみたはきにけり一つらに我とやいはん仏とやいはん
一聲にみたはきにけりへたてなくたよくみれはいきほとけなり
たそくとたつぬるほとは誰もなしたそにもあらぬたそにこそあへ
山さとうき世いとはんともかなくやししく過し昔かたらむ
あやしくもかへすは月のくもるかなむかしかたりに夜や更ぬらむ
あふことはとらふす野へと思ひても帰るあしたに道やおしまむ
ほとけとはなにをいはまの苔むしろたしひしんにしく物そなき
りんしうのさいこのねんもおなし念ねんくむねんいつもしやう念
桜花春のいろとはしりながら露をわけて何たつぬらん」(14オ)
匂ひくる風のたよりにわけ入てなを山ふかく花を尋ねん
たつねきて春をそよそなるみ吉のたかまの山のみねのしら雲
いとひつる煙をやかてしるへにてひらのたかねにすめる月影
花ちりて見る人もなき木のもとに独りさひしき風の音哉
道とをくたつねこしてはもとぎつる麓の里そとまり成ける
かはらしなにこるもすむものりの道同しなかれと泣てしりなは
見ることは夢もうつよもおなし物ぬるとねぬとのかはるはかりそ
たつねきてうしこそ見えね夏山の梢にせみのこゑはかりして

慶長十一年他本取帰ヲ暫留此帑。折節閉テ在之
故写之者也。但分不見一笑々。

「(14ウ)